

# 静岡県立大学国際関係学部生に見る 「将来やりたいことがない」の決定要因について

津 富 宏

静岡県立大学国際関係学部

## 要約

キャリア支援の第一の困難は、多くの学生たちが「将来やりたいことが分からない」ということである。そこで、静岡県立大学国際関係学部生 135 名を対象に、「将来やりたいことがない」を従属変数とした回帰分析を行い、規定要因として、「努力は無意味」因子、「覇気の不足」因子、「周囲への同調」因子、「現状への不満」因子、「知的作業の不得手感」因子を見出し、今後のキャリア支援にとっての意味合いを考察した。

## 標本

平成 18 年度に、静岡県立大学国際関係学部 2 年生であった 135 名。平成 18 年 10 月半ばに、第二外国語のクラスにおいて質問紙を配布し、その場で実施して回収した。よって、授業に出席していた学生の全数調査である。男女比は 3:1、国際関係学科・言語文化学科の比は 1:2、県外・県内比は 4:6 であり、国際関係学部の平均的な学生像とってよい。本考察が注目する「将来やりたいことがない」の度数分布（表 2）をみると、「とても当てはまる」が 10 名（7.4%）、「やや当てはまる」が 33 名（24.4%）と、合わせておよそ 3 分の 1 となっている。

## 分析結果

これらの変数を用いて、ヴァリマックス回転で因子分析を行った。固有値=1 を基準（因子数=9）として解を求めた。9 つの因子を、それぞれ、「努力は無意味」因子、「現状への不満」因子、「疎外感（メンタルな不調）」因子、「周囲への同調」因子、「覇気の不足」因子、「面倒なことの回避」因子、「自己主張の不得手感」因子、「計画性の不足」因子、「知的作業の不得手感」因子と命名する。

「将来やりたいことがない」を従属変数とし、これらの因子及び若干の基礎属性変数を用いて行なった回帰分析の結果を表 1 に示す。 $R^2$  はますますの大きさ（0.40）であり、モデルの確かさを示している。回帰係数を見ると、相対的に影響が大きいのは、「努力は無意味」因子（0.27）、「覇気の不足」因子（0.25）、「周囲への同調」因子（0.23）、「現状への不満」因子（0.22）、「知的作業の不得手感」因子（0.18）、「疎外感（メンタルな不調）」因子（0.14）である。最初の 5 因子は、「将来やりたいことがない」に対して 5%水準で有意な効果を及ぼしている。

## 考察

本分析の結果を踏まえ、「将来やりたいことがない」傾向を減少させるための方策について考察したい。「将来やりたいことがない」傾向を予測する要因として立ち現れたのは、「努力は無意味」因子、「覇気の不足」因子、「周囲への同調」因子、「現状への不満」因子、「知的作業の不得手感」因子のほか、「疎外感（メンタルな不調）」因子である。

第一に、「努力は無意味」因子を減じるため、将来への努力への意義を感じさせ、向上心を持たせることが重要となる。この因子は、勉強の否定も項目として含んでおり、大学での学びが将来にとって意味があると実感できるような教育のあり方（たとえば、インターンシップと教育内容の有機的連携）が必要であることを示している。

第二に、「覇気の不足」因子を減じるため、チャレンジすることの大切さを伝え、小さな失敗体験の乗り越えを意図的に用意する必要がある。この因子には、いわゆるうたれ弱さ（挫折しやすさ）の要素が含まれており、失敗を肯定的にとらえることの意義を理解させる必要がある。

第三に、「周囲への同調」因子を減じるため、他人と同じような行動をとるのではなく、自発的な行動を要求される場面を多く設けていく必要がある。そのためには、部活動・サークル活動など、他人と意見を交えながら、自らが主体となって作り上げていく活動に積極的に参加させる必要がある。

第四に、「現状への不満」因子を減じるために、学生に対しては、学生生活という今を充実することが大切であるという指導を続け、日々の生活から喜びを見出せるような過ごし方、気持ちの持ち方を身につけさせる必要がある。つまり、サークルなど集団での人間関係の持ち方の指導や、学業の充実感を挙げるためのレポートの書き方などの勉強の仕方の指導である。

第五に、「知的作業の不得手感」因子を減じるために、授業や教育を通じて意図的に頭を使わせ、それに対するポジティブフィードバックを多く与える必要がある。いわば、「楽しく頭を使う」場面を増やすということであろう。

以上、「将来やりたいことがない」という課題を解いていくには、学生生活を、よりよい気付きの機会、学びの機会としなければならないことが明らかになったように思う。そのためには、一人ひとりの学生たちが、将来や自分、学生生活、人間関係をどのように認知しているかを踏まえ、その変容を迫る根気強い教育や支援が必要であろう。どのようなキャリア支援も、内面の育ちをどう支援するかという視点を欠いては成功しない。

表 「将来やりたいことがない」を従属変数とする回帰分析の結果  $R^2=.40$

	非標準化係数		標準化係数	t	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
(定数)	3.21	0.49		6.49	0.00
性別	0.13	0.26	0.05	0.53	0.60
学科	-0.03	0.22	-0.01	-0.14	0.89
高校所在地	0.24	0.28	0.09	0.87	0.39
一人暮らし	0.03	0.28	0.01	0.12	0.90
恋人の有無	-0.13	0.22	-0.05	-0.57	0.57
兄弟姉妹	-0.78	0.42	-0.14	-1.85	0.07
「努力は無意味」因子	0.41	0.12	0.27	3.53	0.00
「現状への不満」因子	0.30	0.10	0.22	2.91	0.00
「疎外感（メンタルな不調）」因子	0.21	0.11	0.14	1.84	0.07
「周囲への同調」因子	0.33	0.11	0.23	3.04	0.00
「覇気の不足」因子	0.39	0.13	0.25	3.00	0.00
「面倒なことの回避」因子	0.07	0.12	0.04	0.53	0.60
「自己主張の不得手感」因子	0.03	0.11	0.02	0.27	0.79
「計画性の不足」因子	0.17	0.12	0.11	1.38	0.17
「知的作業の不得手感」因子	0.27	0.12	0.18	2.23	0.03

太字は 5%水準で有意 イタリックは 10%水準で有意